

社説

社會榮辱の權

近年來人民自治の議論盛にして一世を擧て之に靡き文明の士人としては苟にも自治を難す可らざるが如き勢あるは世運漸く屈從主義を根本より覆さんとするを證するものにして我々の私に賀する所なりと雖も自治とは市町村の自治もしくは郡區長公撰などの事に止まる者ならず社會をして無用なる國家の干渉を免れしめ社會自ら社會を治むる自治の最大なるものなるに然るに斯る最大の自治は實際に行はれずして社會は寧ろ國家の權力に壓倒せらるゝのみならず世間には種々の自治の實行を論ずるものさへ殆んど絶無なるは我輩の深く遺憾とする所なり抑も國家は一個人の多數集合したるものに過ぎざるが如く其質は一個人が直に國家を組織するものに非ずして家を組織し郡區町村の如き團體を組織し社會を組織して而して後に國家を爲すものなれども此中最も堅固有力なるは社會にして個人は時として死す可し郡區は時として變ず可し國家は時として亡ぶ可し雖も社會に至ては永遠無窮なるものなれば町村及び個人にして其自治すべき事を自治するの權ありとすれば社會も亦自治すべき範圍内に於て自治するの權あり毎事國家より無用の干渉を受けざらしめんことを期す可きのみ譬へば國家の生存に最も必要なるは實刑の權を自から國家に取るの一事に在るが如く社會生存の最要條件は社會榮辱の權を社會自から掌握するに在るは争ふ可らざるの道理なるに世間の自治論者が汲々として町村郡區の自治を主張しながら社會の名譽を以て社會の刑罰を以てするの權すらも一に國家に委任して社會自から其權を使用せざるは如何ぞや英國の大都會に於ては時の大宰相若しくは大政治家等に對し市の自由權を與へて其人物を表彰するものとあり即ち純然たる社會榮辱の權を國家以外に揮ふもの以外ならず或は又市民が或る人物の爲めに隊を作りて行列を催はし又時として結社團體より物品、金牌などを贈るが如き何れも社會が國家以外に榮辱の權を取るの實を示すものに非ざるはなし斯くの如き社會に在りては人物の眞價を識して其天職を尊重し假令の國家より爵位勳等の榮譽を授けざるも社會は之と同一の待遇を與ふるに躊躇せず彼のマスローが英國首相の譽を以てカアライルと大學總長の地位を競争して得る能はざりしが如き爵位勳等も人物の眞價に及びざるの事實を證明して餘りあり東洋流に之を評すれば天爵と人爵の別を明に表したるものと云ふ可し然るに人爵の譽なしと雖も自から天爵の尊ありなど唱ふる所の東洋人は却て人爵崇拜の癡夢より醒むる能はずして一九一〇年の大政たりし者に非ずんば政黨の首領たる能はず政府の高等官たりし者に非ずんば社會の重役たる能はず爵位勳章を有せしものに非ずんば社會上の集會に於ても威張るゝ能はず社會自から榮辱の權を取るの一事に至ては形影だも見る能はずと自ら唱ふる所の自治論に對しては恥づ可き次第ならずや此事たる俗々たる世間の凡俗に於ては醜に責む可らざるものありと雖も稱して學者、士君子と云ふ者にして猶ほ大臣を推し、高官を推し、華族を推し一代の精神先生も役人の前には小吏下人の如くに恐縮するとは沙汰の限りと云ふ可し昔藤原の權高が初めて宋學を唱へ

て文藝を起さんとするや徳川家康たましく怪鳥の講席にありて禮なかりしに徳高之を責めて學問を聴くの道に非ずと云ひしかば家康も禮を正して禮を修めたりと云ふ今日の學者は自ら見るものと何ぞ其低きや社會榮辱の權は國家を離れて社會自らの之を行はざる可らず我輩は先づ學者士流の人々が自から人爵崇拜の癡夢を一掃せんことを期するものなり

整理公債の發行、征討費の償還

西南役の征討費として第十五國立銀行より借上げたる金額一千萬圓の内二十八年中に二百萬圓を償却し發給八百萬圓の内四百萬圓は二十九年年度に、四百萬圓は三十年年度に償還する筈なるが大蔵大臣は昨日を以て別項に記す如く二百萬圓の整理公債を發行して本年度に拂ふべき半額を償還するものとしたりたれば一兩日中に日本銀行より十五銀行に交付するべしと云ふ

航海業の膨脹

二十七年五月末即ち日清戰爭前日本の船籍に屬する汽船噸數は十八萬一千八百九十九噸に過ぎざりしに戰爭終局後本年一月末に至ては三十三萬二千二百五十三噸に上り其増加殆んど戰爭前に倍したるに既に噸數を謂ふべきに航海獎勵法發布の結果は又忽ち外國航路の擴張を促かし東洋汽船會社起り續て大東汽船會社の發起あり日本郵船會社は多年の計畫を熟して愈々歐洲航海を擴張し米國及び澳洲航路に着手するの運びに至りたり今以上三會社の新造せんとする外國航海汽船噸數を聞くに其概數左の如し

Table with 2 columns: Company Name and Tonnage. Includes entries for 東洋 (三萬四千九百二十噸), 大東 (九千噸), 郵船 (三萬九千噸), 合計 (九萬九千二百二十噸).

右の内郵船會社の分は未だ詳細の設計を聞かざれども歐洲航海船二隻(南洋航路)及び米國航路船一隻(平均六千噸)と此噸數七萬二千噸(米國及び澳洲航路船六隻、平均四千噸)と此噸數一萬四千噸とを算入せしむべし

前記三會社の汽船噸數を落成するに於ては我々汽船噸數は實に四十七萬二千七百七十三噸に上り殆んど全世界に旭章旗の輝かざる所なきに至らん而して以上の汽船は來年度に至らば何れも航海を開始すべければ來年度の航海獎勵金、以東洋汽船會社に百三萬八千八百餘圓、大東汽船會社に卅九萬八千八百餘圓、兩社合計百四十三萬七千餘圓にして郵船會社は二百萬圓内外に及ぶべければ其總額は實に三百三十四萬圓に上るべしと云ふ當業者の伎倆、十三四萬噸の汽船が一時に増加するは異數の進歩にして賀すべきものとせざるに對する資本は二千萬圓を要し獎勵金は三百萬圓を超える大事業なれば其事業の成敗利鈍は我が國力に大關係あるものにして當業者は僅か二三年の間に斯る進歩をなしたるかと云ふに戰爭中二十餘萬の軍隊を我が國人の手に輸送したる腕前は以て其進歩を確かむるに足るべく郵船會社が孟買航路に於て意外好結果を得たるを見、歐洲航路も亦意外に好望なるを聞かば當業者の伎倆如何は把握するに足らずと雖も到る處資本に饒なる經驗に富みたる競爭者少ならずれば轉手を破らざるは我が國人の擧て望む所なるべしと云ふ

東洋大東兩汽船會社

發起認可申請中なる東洋汽船會社は農商務省にて既に認可の事に内定し遞信省も不日認可すべし模様なれば愈々兩省とも認可の上は直ちに創業總會を開き假令の確定及び役員の撰舉をなす筈にて其等の手續き済み次第野物一郎氏は歐米視察の途に上り又東洋汽船會社と大東汽船會社とは既に合併したるが如く傳ふるものあれば兩社の重なる發起人の間に時々交渉ありし迄に未だ合併の協議調ひしにあらざる兩社の合併は早晩事實となるものと云ふべからざれば當分は先づ兩立の儘創業の手續きをなす事ならんこと云ふ

郵船會社の増資成就 會て本紙上に記せしが如く郵船會社増資の由來は昨今に始まりしにあらず外國航路擴張の事は多年同社の計畫せし所なれども其調査熟せず其時機來らざる爲め世人をして稍々遲緩の思ひあらしめしに日清戰爭は我が海運業の發達を促かし航海獎勵法は一層其進歩を助けたる折衝航路の調査も成り擴張の方針立ちたるを以て愈々増資の事を内定し臨時總會を開く運びに至りしものにして頃日本株主の一派が頻りに騒ぎ立てたるも其發達の時期を早めたるに預つて力あるが如き觀あれども斯る一時の空騒ぎが多年決せざる大方針を速決せしめしと感ずるは大間違ひにして其騒ぎが圓りする機に投じて奇利を博したるものあるは固より僥倖と謂ふべしとなり

免狀下附の鐵道

前號の紙上に一昨日數鐵道の免狀下附ありし由記せしは誤聞にて一昨日は目下上京中の香川縣知事の許に四國鐵道の假免狀を送付したるのみ他は昨日を以て各縣廳に送附したるよし其本免狀及び假免狀下附の鐵道を更に左に記載すべし

Table with 2 columns: Railway Name and Location. Includes entries for 本免狀下附 (播但鐵道延長線, 伊萬里鐵道, 豆相鐵道, 以上三鐵道), 假免狀下附 (南豐鐵道, 毛武鐵道, 東肥鐵道, 京越鐵道, 土佐鐵道, 德島鐵道, 以上六鐵道).

(相王鐵道は未だ假免狀下附とならざるよし)

函館築港に關する道廳長官の訓令

函館に兼て出願中なりし同築港工事は原北道廳長官より愈々去る十四日同區(今般函館港内)築港防壁築設及び海面埋立を許可するに付左の條項を遵守すべしとて二十四箇條の訓令を發したるよし同訓令に據れば諸工事も許可の日より一箇年以内に着手し其内港内浚渫は着手の日より四箇年以内に、防砂堤築設は着手の日より二箇年以内に、海面埋立は着手の日より三箇年以内に竣功せしむる筈なりと云ふ

探鍊製煉の操業、技師の辭表

佐渡生野兩鐵山及び大坂製煉所拂下の事既に確定して入札規定取調委員の任命ありたれどもいよいよ拂下する迄は是迄通り御料の事業として探鍊製煉をなす筈にして拂下の不可を論じたる技師和田維四郎(御料鐵山事務取扱囑托、渡邊渡(佐渡御料支廳長)中澤若太(御料局技師)の三氏は所論に對し引かざるを得ざる場合となりて拂下御裁可の當時夫々宮内大臣迄書面を差出したれども中澤氏の方は待命書、渡邊氏は辭職願、和田氏は囑托解除願を申出でたるものにして蓋し皆聞届けられざるべし是れ拂下の始末を告ぐる迄には必要なる人々なればなり而して一般入札に付するに先づ拂下物件の明細書を造らざるべからず又入札望みの向は此明細書を熟覽するの外に山元の實況をも査察せざるべからず御料の操業をなす其間に此種の視察員を無制限に入込

夜涼車

第卅三回

石山に號がクロコフに掛けたる清水八束は、掛けたる以、云はで敷屋の、與まりたるりたり、左れども此の徒の巢窟なれば、處に居る可しとは、殘念なる、博士は間再び上なる室に、出此身が一寸と名を、叔母御いかり、合點た、だが前何時までた、マと思ふ時まで、居ると云ふふとを、此身が自分で、紳士に渡して道るのの様子を見て來る立上りて、出で去先生、待て買はうエー?と振向きたる鷲尾の先生、れ前何か忘何も忘れたとは想貨物は生物だぜ當り前だ生物なら飯を食う左様よ、夫れが如く飯料は此身に自腹飯料(叔母御、違へね)叔母御、とを忘れた、勘忍と、博士が懐より眞實に此前は良いと追従を云ふ内、博士戸を締り、立切られたる、瘦せたる兩手の、さして赤子を引出す、くやと、想はる、許な博士敢て、汝能く世争で海に千年、山に大膽漢、如何に本心、眼に照らされて、弄する才はあゝ、汝が心事を知れり、の其間、附けつ狙ひ、ウゝ手に入る敵の